
遊戯王GX～居眠りしたら異世界へ～

IC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〜居眠りしたら異世界へ〜

【Nコード】

N60940

【作者名】

IC

【あらすじ】

試験中に居眠りをしてしまい目が覚めたらなんとそこは遊戯王GXの世界に飛んでしまった主人公。そのまま試験を受けて、デュエルアカデミアに通うことになったのはいいけど、使うデッキはシンクロデッキ・・・使っているのかこれ？

前に書いていた小説とまったく、違うストーリーで書いていこうと思っています。

この小説の禁止・制限は2010年3月のモノです。また、原作で使用されていたカードは禁止でも使用します（例、強欲な壺）

主人公の名前が誤って別の小説の主人公の名前で書いていたの
で修正しました(11/4)

プロローグ(前書き)

プロローグです

プロローグ

「試験終了五分前だ」

「ん……」

伏せていた体を起こす

先ほどまで寝ていたためか少しボーっとする

ようやく脳が覚醒してきた

今日は大学の試験の最終日でこれが最後の試験だ

この教授はめんどくさい事に途中退出が無く最後までいなければならぬのだ

「ふあゝ（ようやく後五分かこれが終わればいよいよ俺の新しいデッキのデビューだぜ）」

試験が終わった後に俺は友人達とカードゲームをする約束をしていた
昨日ようやく届いたカードでやっとの事作りたかったデッキが完成
したので

（少し無理しただけあって完成率はかなり高いからいいデュエルができるはず）

そんなことを考えながらも最後に名前だけは確認しておこうと解答用紙を見ると

(ん？受験番号？・・・学籍番号じゃないのか？)

そこには名前は間違っていないのに自分の学籍番号とは違う番号が書いてあったそしてその解答用紙を改めて確認すると驚くべき文字が目に入ってきた

(な！デュエルアカデミア入学試験解答用紙？・・・どうなっているんだ？)

「試験終了だ筆記用具を置きたまえ！」

訳のわからないまま試験終了の時間が来てしまったようだ

そして、試験官が机を周り解答用紙を回収して回っている間に少しでも状況確認を行おうと自分とその周囲を確認する

まず目に入ったのは机の右上に置かれた写真付きの受験票

(名前に・・・変化はない、そしてこれは俺の昔の写真？だいたい中学後半から高校に入ったぐらいのだな、住所は・・・何だこの地名見た事も聞いた事も無いぞ、残りは受験番号か)

「本日の試験はここまで明日は実技試験だ既定の時間に遅れないように以上だ！」

そう言うと試験官は回収した解答用紙を手に教室から出ていった

それと同時に教室内が騒がしくなる

それぞれが席を立ち帰り支度を始め帰宅していく

しかし俺は動けずにそこに座っていたのだが

「え！」

おもわず目の前を通りかかった少年を見て驚きの声を上げてしまった

だってそこには

「？なんすか？」

アニメの遊戯王GXの登場人物である丸藤翔だったのだから

「い、いや、何でもない。すまなかった」

「？そうっすか」

不思議そうな顔をしながらその場を去って行った

考えたくもないが……これはネット小説でもよく読んだ事がある……

「トリップって奴か？」

プロローグ（後書き）

内容とデッキを変えて新しく書き始めます。とりあえず今日は後二話投稿します

デュエル1「入学試験・前編」(前書き)

とりあえず初デュエル

デュエル1「入学試験・前編」

「次！47番・・・」

実技試験当日

俺は普通に待機している

正直昨日はあの後どうするか考えたが家が試験会場からそれほど遠くは無かったため普通に帰った

家に帰ってから落ち付いて考えてみると色々な事が頭の中に浮かぶ
家族の事や友人、学校の事などを思いだした

どちらかという俺は無口な方だったらしく友人は数えるほどしかない

兄弟、姉妹はいなく両親は数年前他界し、現在俺は親戚の家に世話になっている

DMは親戚の姉さんのススメで始め、現在その姉さんはカードデザイナ―としてインダストリアル・イリユージョン社に勤めている

とりあえず、これだけの事は思いだせた・・・

いや、おそらくこれは思いだしたのでは無く、憑依した少年の記憶を見ただけなんだろう

「……………69番！69番！いないのか69番！」

気が付くとかいぶ試験は進んでおり自分の番号が呼ばれた

「は、はい！います！ここにいます！」

慌てて試験会場に降り指定されたデュエル場に向かう

「呼ばれたら一度で来い！」

「すみません。受験番号69番井上悠です！お願いします！」

「うむ！よし！始めようか」

デュエルディスクを起動させる

「デュエル！！」

（明日香side）

「ずいぶんのんきな受験生もいたものね」

デュエルアカデミア実技試験。多くの受験生がこのデュエルの結果で合否が決まる

私は既に推薦で合格は決まっているが形式上実技試験を受けなければならぬのでここ来たが、自分の試験は終わり興味本位で会場に

残っているのだ

そんな試験の最中に今呼ばれた受験生はボーっとしていて自分の順番に中々気づかなかった

「バカなのでしょ」

私の隣には私と同じく既に推薦で決まっている親友の少女

「あるいは、強者故の余裕か・・・」

「あら、69番の彼はあなたのお眼鏡にかなって？」

この子は女性でありながらもかなり強い。そして、相手の実力を見抜く眼力もなかなかのモノそんな彼女が一目置くんだから

「そう言うわけでは無いわ・・・ただ、何か不思議な物を感じるの・・・」

「なら、見て見ましようか。その”何か”とやらを」

＼sideout＼

＼悠side＼

手札は・・・よし悪くない

「私の先攻！ドロー！」

え？先攻後攻つてジャンケンじゃないの？そういやアニメでも早い者勝ち？みたいな感じだったな

「私はビッグ・シールド・ガードナーを守備表示で召喚！ターンエンドだ！」

ビッグ・シールド・ガードナー（レベル4 守2600）

試験官 LP4000 手札5枚 フィールド ビッグ・シールド・ガードナー（レベル4 守2600）

悠 LP4000 手札5枚 フィールド なし

わお！いきなり守備力2600とかきつくね？

「俺のターン、ドロー！」

言ってみたはいいが、少し照れるぜ。

相手の事は置いといてまさか俺のデッキが転生する前の世界で作った新しいデッキ・・・ではなく、その前に作った、いわゆるファンデッキの自己流アレンジ版

くそ、あの新しいデッキ、カード集めるのに苦労したのに

しかし・・・使っているのかこれ？

・・・・・・・・・・・・・・・・ま、いつか！いくぜ！

「俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードと手札を確認・・・んんん微妙だな

「俺はモンスターを一体裏守備表示で召喚さらにカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

試験官 LP4000手札5枚 フィールド ビッグ・シールド・
ガードナー（レベル4 守2600）

悠 LP4000手札3枚 フィールド 裏守備モンスター1
体 伏せカード2枚

「私のターン！ドロー！私はゴブリンエリート部隊を攻撃表示で召喚！」

ゴブリンエリート部隊（レベル4 攻2200）

「さらに速攻魔法、サイクロンを発動！右の伏せカードを破壊」

竜巻が起こり伏せていたミラーフォースが破壊される。

「くっ！」

「ふっ、当たりだったか。よし、ゴブリンエリート部隊で裏守備モ

ンスターに攻撃だ」

ゴブリンエリート部隊（レベル4 攻2200）VSダーク・リゾネーター（レベル3 守300）

「チューナーモンスター、ダーク・リゾネーターの効果発動1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない」

「くっ！破壊耐性のモンスターか。しかし、チューナーモンスターとはな」

チューナーを知っているのか？

「ゴブリンエリート部隊の効果で戦闘をしたターンのバトルフェイズ終了時に守備表示になる。ターンエンドだ」

試験官 LP4000 手札4枚 フィールド ビッグ・シールド・ガードナー（レベル4 守2600）、ゴブリンエリート部隊（レベル4 守1500）

悠 LP4000 手札3枚 フィールド ダーク・リゾネーター（レベル3 守300）伏せカード1枚

「俺のターン！ドロー！」

ふっ、ミラフォ破壊されたときはビヤツとしたけど、なにげに思い通りに進んでるな

ドローしたカードを見て、顔に笑みが浮かぶのがわかる

「このデュエル、もらったぜ！」

「何だと？」

俺の呟きが聞こえたのか、試験管の表情が少し変わる

「1ターンキルを宣言するとは……いいだろう！貴様の力見せてみる！」

なんか、熱いなこの試験管

「いくぜ！俺は手札から、バトルフェーダーを墓地に送りパワー・ジャイアントを特殊召喚！攻撃表示！」

パワー・ジャイアント（レベル6 攻2200）

「パワー・ジャイアントの効果発動！このカードは、手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地に送ることで特殊召喚できるが、墓地に送ったモンスターのレベルの数だけレベルを下げる」

パワー・ジャイアント（レベル6） - バトルフェーダー（レベル1）

|| パワー・ジャイアント（レベル5）

「レベル5、パワー・ジャイアントにレベル3、ダーク・リゾネーターをチューニング！」

ここまでくれば、だいたいこのデッキが誰のファンデッキかわかっただろう

「な、なんだと！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

俺のデッキは！

「我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ジャック・アトラス。キングのデッキのアレンジ版だ！

レッド・デーモンズ・ドラゴン（レベル8 攻3000）

「ま、まさかそんな・・・シンクロ召喚・・・だと・・・シンクロモンスターは世界に数枚しか・・・」

え？あるの？

「・・・お、俺のターンは、まだ終わってないぜ！」

驚きのあまり、どもっちまった

「俺は手札よりダーク・バグを召喚！攻撃表示！」

ダーク・バグ（レベル1 攻100）

「ダーク・バグの効果発動！このカードが召喚されたとき、自分の墓地から、レベル3のチューナーを特殊召喚する。特殊召喚されたモンスターの効果は無効化されるがな。蘇れ！ダーク・リゾネーネ

「！」

ダーク・リゾネーター（レベル3 守300）

ここからがアレンジ版だ！

「レベル1、ダークバグにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」

台詞は・・・知らん！

「集いし決意が、新たな力を呼び起こす。王者に集え決意の力！シンクロ召喚！決意の輝き、アームズ・エイド！」

アームズ・エイド（レベル4 攻1800）

即興で作ったにしてはまあまあ・・・かな？

「二度目のシンクロ召喚だと！」

「アームズ・エイドの効果発動！1ターンに1度、装備カード扱いでモンスターに装備でき、そのモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。レッド・デーモンズ・ドラゴンに装備！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン（レベル8 攻3000）（レベル8 攻4000）

「攻撃力が4000だと！」

「バトルフェイズ！レッド・デーモンズ・ドラゴンでゴブリンエリ

「ト部隊に攻撃！」

アームズ・エイドを装備してんだから、ここは

「アブソリュート・パワーフォース！」

右手に装備されたアームズ・エイドに炎が纏いゴブリンエリート部隊を破壊する

レッド・デーモンズ・ドラゴン（レベル8 攻4000）VSゴブリンエリート部隊（レベル4 守1500）

「装備されたアームズ・エイドの効果発動。装備したモンスターが、戦闘によりモンスターを破壊した時、破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

試験管 LP4000 - ゴブリンエリート部隊（攻2200）＝1800

「くっ！だが！まだ私にはモンスターが残っている！そして君のモンスターは1体でそのモンスターも攻撃を終えた。やはり、先ほどの言葉はハツタリか！」

たしかに、その通りだが

「まだ、俺のバトルフェイズは終わっていないぜ！レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果発動。デモン・メテオ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの口から灼熱の炎弾が放たれビッグ・シールド・ガードナーを破壊した

「な！どういうことだ！なぜ、ビッグ・シールド・ガードナーが」

「レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果、守備モンスターを攻撃した場合ダメージ計算後、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する」

「な、なんだと！……だが、ここまでのようだな。これで君のバトルフェイズは……」

「リバースカードオープン！トラップカード、破壊神の系譜を発動。相手フィールド上の守備モンスターを破壊したターン、自分フィールド上のレベル8のモンスター1体を選択肢し、もう1度攻撃できる。選択するのはもちろん、レッド・デーモンズ・ドラゴンだ」

「ば、バカな……」

「レッド・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！アブソリュート・パワーフォース！」

「ぐわああああ」

試験管 LP1800・レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻400

0）=0

「よー……」

会場が少しざわついている・・・

「まさか、本当に宣言道理に1ターンキルをしてしまうとは・・・
これで試験は終了だ後日、結果を送ろう」

「わかりました！ありがとうございます」

いや～なんか上手くデッキが回ったな～

さて、どうしようかなと考えていると

「あなたのデュエルなかなか面白かったわよ・・・もう少し会場
にいなさいこれから隣のデュエル場で面白いモノを見せてあげるか
ら」

「は？」

すれ違いざまに聞こえた声で振り向くとオレンジの髪のツインテ
ルの女の子の後ろ姿が見えた

「お「君！試験は済んだのだから早く上に上がりなさい」・・・は
い」

試験官の人に怒鳴られたので二階席に上がりそこでさっき見たオレ
ンジの髪の女の子を探す

「いた」

オレンジの髪というのは珍しく彼女の姿は簡単に見つかった

ちょうどデュエルが始まるらしく見やすい席へと移った

「面白いものね・・・何を見せてくれるんだ？」

「見ていればわかるわよ」

「ん？」

後ろから聞こえた声に振り向くと

天上院明日香だと

そこにいたのはアニメの主要キャラである天上院明日香だった

「始まるわよ」

「あ、ああ」

視線をデュエル場に目を戻す

まさかそうそうに原作キャラと会うとは思わなかったな・・・

そついや、もう翔に会ってたな

デュエル1「入学試験・前編」(後書き)

もう一話投稿します

デュエル2「入学試験・後編」(前書き)

ちょっと短いです

デュエル2「入学試験・後編」

?????side

まさか、私以外にもいたとは思わなかったわ

69番、確か名前は・・・井上悠・・・

「私のターン！私はシャイン・エンジェルを召喚！ターンエンド」

シャイン・エンジェル（レベル4 攻1400）

試験官 LP4000 手札5枚 フィールド シャイン・エンジ

エル（レベル4 攻1400）

???? LP4000 手札5枚 フィールド なし

あら、いけない。いつの間にかデュエルが始まってしまっていたわ

「いきます！私のターン、ドロー！」

手札は・・・なかなかいいわね

「私は手札抹殺を発動！互いの手札を全て墓地に送ります」

確か、彼は1ターンキルを見せてくれたわね・・・なら

「さらに私はおろかな埋葬を発動！デツキからボルト・ヘッジホッグを墓地に送ります」

なら、私も同じものを見せてあげるわ

「私はチューナーモンスタージャンク・シンクロンを召喚！そしてジャンク・シンクロンの効果発動！このカードが召喚に成功したとき墓地のレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚できる。私は墓地のスピード・ウォリアーを守備表示で特殊召喚」

ジャンク・シンクロン（レベル3 攻1300）

スピード・ウォリアー（レベル2 守400）

「そして、墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動！自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する時、墓地から特殊召喚できます。ただしこの効果で特殊召喚されたこのカードがフィールドから離れた場合、除外されますけどね。私は墓地からボルト・ヘッジホッグを3体特殊召喚します」

ボルト・ヘッジホッグ（レベル2 攻800）×3

これで準備は整った

「いきます！レベル2スピード・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

「また、シンクロ召喚だど！」

さすがに、幻ともいわれるシンクロ召喚を扱うものが二人もいれば

驚くわよね

1度、視線を彼の方に向ける

ふふ、驚いてるわね

見せてあげるわ！私のシンクロ召喚を！

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！来なさい、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー（レベル5 攻2300）

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！シンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のレベル2以下の

モンスターの攻撃力の合計分、攻撃力をアップする。私のフィールドにはレベル2のボルト・ヘッジホッグが3体。よって攻撃力は2400ポイントアップ！パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウォリアー（攻2300） （攻4700）

「こ、攻撃力が4700・・・」

「まだです。手札より魔法カード、ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーに装備！」

これで・・・

「終わりです！ジャンク・ウォリアーでシャイン・エンジェルを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウオリアー（攻4700） - シャイン・エンジェル（攻1400） = - 3300

試験官 LP4000 - 3300 = 700

「くっ！だが、シャイン・エンジェルは戦闘破壊で墓地に送られたとき攻撃力1500以下の光属性モンスターを・「ジャンク・アタックの効果発動」なに？」

「装備モンスターが戦闘によりモンスターを破壊し墓地に送った時そのモンスターの攻撃力の半分を相手ライフに与える。シャイン・エンジェルの攻撃力は1400。その半分の数値は700つまり、あなたの残りライフポイント分です」

「なっ！」

試験官 LP700 - 700 = 0

ふう〜ま、こんなところね

side out

悠side

俺は、オレンジの髪の少女のデュエルを見て、驚きを隠せなかった

もしかしたら彼女も俺と同じ・・・

「あれが、彼女のシンクロデッキよ」

隣で見ていた天上院さんの言葉に彼女の顔を見る

「シンクロ召喚について何か知っているようだな」

「ええ、だいたいの原理はティアから聞いてるわ」

「ふうん」

あの子、ティアって言うのか

「ただ、ティア以外でシンクロ召喚をする人はあなたが始めてよ」

「そんなに珍しいものなのか？」

「珍しいも何も、世界に10人といないはずよ」

10人くらいはいんのか

「あなたもその一人ということよ」

後ろから聞こえた声に振り向くとそこには先ほどまでデュエルをしていたオレンジの髪のツインテールの少女がって……

「どうだった？私のデュエルは？」

「……」

「?どうしたの?」

「あ、いや、なんでもない。うん!なんでもないぞ!」

いや、正面から見て驚いたよ。だって

「?そう」

外見、リリカルな魔法少女のティアナさんまんまだし

「それで、どうだった?」

「ああ、あれな。なんつーか……きれいだったよ」

「へ／＼／＼」

「あら」

何故にティアさん顔が赤い?天上院さんはなんか微笑ましい様子で
こっち見てるし

だってさ

「あんなにきれいに、LPOにするって、なかなか見ないからさ」

狙ってできるもんじゃないだろ、LPジャスト0って

「」
「」
「」

どうして二人とも黙ってたんだ？

「まぎらわしいのよー!!」

二人に怒鳴られた

「なして？」

数分後……

「ごめんなさい、少し取り乱したわ」

「ふん」

天上院さんは落ち着いたが、ティアさんはまだ、ふくれっ面だ

「改めて自己紹介するわね。私は天上院明日香よ」

はい、知ってます

「……」

まだ、拗ねてらっしゃいますか

「ほらティアも」

天上院さんに言われ

「……ティアナ・ランスター」

渋々答えてくれましたが……まんまかい！

「井上悠だ。よろしく。天上院さん、ランスターさん」

「よろしくね、悠君。後、私のことは明日香でいいわ」

「おう！よろしくな！明日香、ティア！」

「……………よろしく」

そのまま、三人で残りの試験を見てから帰った

その間にいろいろ話してみたが、明日香とティアは幼なじみらしく

ティアにはお兄さんがいてインダストリアル・イリユージョン社で働いているらしい

名前はティードというらしい……ここって遊戯王GXの世界だよな？

十代は原作通り遅刻してクロノスとデュエルし見事に勝った

そのデュエルに明日香もティアも興味を持っていた

しかし、ティアはずっと不機嫌なまんまだった……

なんでだろう？

デュエル2「入学試験・後編」(後書き)

次回は未定です

デュエル3「アカデミアでの初デュエル」(前書き)

メインで書いている小説が詰まったので、こちらを更新します

デュエル3「アカデミアでの初デュエル」

「空が、青いな〜」

俺は今、デュエルアカデミアへ向かう定期船に乗っていた。先日受けた入学試験は見事合格しこうしてデュエルアカデミアのある孤島へ向かっているのだ。

「潮風が気持ちいなあ〜」

寮はオシリスレッドであった。受験番号は69だったからそこまで悪くは無いと思っただのだがこれは、十代達に関わっていけという意味なのだろうか？しかし、俺にとって今、そんなことはどうでもよかった。いや、将来的には結構、重要な事なのだが、俺は今とりあえず……………」

「あ〜〜……………ぎばぢ悪い〜〜」

絶賛船酔い中だった。何故だ！！現実世界ではここまでの船酔いなどした事無かったはずなのに。せつかく、入学祝で姉さんがくれたカードでデッキを組もうと思っただのにな……………手摺に寄り掛かり、うな垂れていると、俺を照らしていたはずの日光が遮られる。何だ？？

「お前、試験の時にシンク口使った奴だよな」

声の主を見上げるとそこには俺と同じくオシリスレッドの制服を着た少年がいた。こいつはもしかや

「俺、遊城十代っていうんだ。お前は？」

やっぱり、十代か。しかも、速攻で対面ですか！

「俺は白河佑太だ。よろしく」

はあくいずれ会おうと思ってたし、あつちから来てくれたのは助かったのかな。

「しかし、あのデュエルはすごかったな。俺、シンクロ召喚って始めてみたぞ！」

「君のE・HEROだつてすごかったぞ」

「へへ、そうだろう。なあ、佑太」

あ、この流れは……

「デュエルしようぜ！俺のHEROとお前のシンクロで」

やっぱりか、十代つてデュエル大好きっ子だもんなあ。まあ、挑まれた勝負は普通だったらすぐにでも喜んで受けるが……

「すまん！」

「ええ！！なんでだよ」

すごく、残念そうな顔で迫ってくる俺だつて、すぐにもやりたいさ……だけどね

「俺、今船酔いですっごく吐きそうなんだ……」

「は？」

さつきから、俺は一步も動いていないどころか立ち上がってもいない。さつきの握手とちよつとした会話だけで、俺の精神はもう限界に近かった。

「別に、やらないって理由じゃないさ。ただ、もう少し後で、デュエルアカデミアに着いてからでもいいか？」

まあ、彼もここですぐにって意味で言った訳でもないだろうし

「わかったぜ！約束だからな！じゃ、また後でな」

そう言い残し十代は船内へと戻って行った。デュエルアカデミアでの最初のデュエルは十代とかもしれないな……。そういえば、ハネクリボーの姿見えなかったな。俺にはカードの精霊を見る力は無いのかorz？

こうして、十代との初対面は船酔いの酷い中での対面だった……。早く着かないかな……。うっぷっ

船に揺られること数時間、やっとの事デュエルアカデミアに着いた
これからすぐに入学式が行われるらしいが、体調不良を理由に一足
先にレッド寮で休んでいた。2時間くらいは休んでいたろう、だ
いぶ体調も良くなり、とりあえずアカデミアの道筋確認と散歩を兼
ねて寮を出た。出るときに寮母の人に今日はどこの寮でも歓迎会が
行われるから早めに帰ってくるように言われ、俺はデュエルディ
スクを片手に寮を後にした。

「なんか、本当に島！って感じだな」

最低限の設備だけあった他はほとんど自然のままだ。慣れるまでは、
簡単に迷いそうだ。

「おゝい、佑太」

「ん？」

声の聞こえた方向を向くと船で知り合った十代がこちらに駆け寄っ
てきた。

「十代君？」

「十代でいいって、俺も佑太って呼んでんだから」

本当にフランクな奴だな

「わかった。で、十代なんだ？」

「ああ、もう体調はいいのか？」

「ああ、バツチリ」

「そうか、良かった」

俺の体調を心配してくれたのか……いやつだ。……と思ったのだが

「それじゃ、さっそくデュエルしようぜ!」

「……は?」

「なんだよ、船で約束しただろ。島に着いたらやるつって」

いや、言ったけどさ、着いて早々にやるのかよ……まあ、いいか。

「わかった。やろうか!」

デュエルディスクを起動させる。

「そこなくっちゃ!」

十代もデュエルディスクを起動させ構える。

「デュエル!」

「先攻は貰うぜ。ドロー」

先攻は十代。まずはどう出てくるのか楽しみだ。

「俺はE・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚だ！さらに俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

十代 LP4000 手札 4枚 フィールド E・HERO ス
パークマン 伏せカード1枚
佑太 LP4000 手札 5枚

「俺のターン。ドロー」

手札は良し、一ターン目から攻める

「俺は手札からダーク・バグを墓地に送り手札からパワー・ジャイアントを攻撃表示で特殊召喚！パワー・ジャイアントの効果発動！このカードは、手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地に送ることで特殊召喚できるが、墓地に送ったモンスターのレベルの数だけレベルを下げる」

パワー・ジャイアント（レベル6） - ダーク・バグ（レベル1）
パワー・ジャイアント（レベル5）

「さらに、チューナーモンスター、ダーク・リペアラーを攻撃表示で召喚！」

「チューナーって事はまさか！」

「十代のの予想通りだよ！レベル5パワー・ジャイアントにレベル2ダーク・リペアラーをチューニング！」

新たな王者の脈動、混沌の内より出でよ！シンクロ召喚！誇り
高き デーモン・カオス・キング！」

「いきなりシンクロ召喚かよ」

シンクロの特徴は早さだからな

「ダーク・リペアラの効果発動！このカードが墓地に送られた時、自分のデッキの一番上のカードを確認し、そのカードをデッキの一番上か下に戻す」

引いたカードは・・・今は必要ないな

「俺は、カードを一番下に戻す。バトルだ！デーモン・カオス・キングでスパークマンに攻撃！」

炎を纏った悪魔がスパークマンに迫る

「デーモン・カオス・キングの効果発動。攻撃宣言時、相手フィールド上の表側表示モンスター全ての攻撃力・守備力をバトルフェイズ終了時まで入れ替える。コンバット・ホイール！」

「なに！」

E・HERO スパークマン 攻撃力1600 1400

「攻撃続行！ファイアソード！」

炎の剣がスパークマンを両断する

「くっ」

十代 LP4000 2800

「トランプカード発動！ヒーローシグナル！自分フィールドのモンスターが破壊された時、自分の手札、またはデッキからレベル4以下のE・HEROと名のつくモンスターを一体、特殊召喚する。現れる！E・HERO バーストレディ！」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

十代 LP2800 手札 4枚 フィールド E・HERO バーストレディ

佑太 LP4000 手札 2枚 フィールド デモン・カオス・キング 伏せカード一枚

「俺のターン！ドロー！行くぜ佑太！今度は俺のHEROの力を見せてやる！」

ここまで言っつて事は、融合素材が揃ったか、融合を引いたな

「手札から融合を発動！場のバーストレディと手札のフェザーマンを融合！来い！E・HERO フレイム・ウイングマン！」

来たか、十代のフェイバリットカード

「だが、攻撃力ならデーモン・カオス・キングの方が上だ・・・が、手札にあるんだろ、ふさわしい舞台へ誘うカードが」

でなきゃ、この状況でフレイム・ウイングマンを出すはずが無いと思っし

「へへ、お見通しかよ。手札からフィールド魔法、摩天楼 スカイスクレイパー を発動」

足元から次々にビルが生えてくる

一際高いビルの頂上に月をバックに立つフレイム・ウィングマン

やべえ、普通にカッコいいんですけど

「バトル！フレイム・ウィングマンでデーモン・カオス・キングに攻撃！スカイスクレイパー・シュート！」

スカイスクレイパーの効果でフレイム・ウィングマンの攻撃力は3100か

「くっ！」

佑太 LP4000 3500

「さらに、フレイム・ウィングマンの効果発動！戦闘で破壊したモンスターは攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

「ちっ」

佑太 LP3500 900

そうだ、これがあったんだ。くそ、ダイレクト喰らったのと同じじやねえか

「ターンエンドだ！さあ、お前のターンだぜ！」

十代 LP2800 手札 2枚 フィールド E・HERO フ
レイム・ウィングマン
佑太 LP900 手札 2枚 フィールド 伏せカード一枚

ちよつと、まずいかな

「俺のターン！ドロー！よし、手札から強欲な壺を発動！デッキからカードを二枚ドロー」

しかし、よく考えると強欲な壺を使うのなんか何年ぶりだろう、こつちの世界だいぶ制限が緩いからな

「さらに手札から速攻魔法サイクロンを発動！スカイスクレイパーを破壊」

「くそっ！」

ふゝアニメ効果のままだからこつちからの攻撃でも効果が発動するから厄介なんだよな

「俺は手札からバイス・ドラゴンを特殊召喚！このカードは相手のフィールドにモンスターが存在し、自分のフィールドにモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚した場合、バイス・ドラゴンの攻撃力と守備力は半分になる。さらにチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを召喚！いくぜ、レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング！」

十代、お前がフェイバリットカードを出すんなら俺も出してやるよ。

俺のフェイバリットカードを！

「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

現れるは黒と赤の竜

「来たか、佑太のエースモンスター」

「行くぞ！十代！レッド・デーモンズ・ドラゴンでE・HERO
フレイム・ウィングマンに攻撃！クリムゾン・ヘルフレア！」

吐き出された炎がフレイム・ウィングマンを包み込みその余波が十代を襲う

「うわっ！」

十代 LP2800 1900

「カードを伏せてターンエンドだ」

十代 LP1900 手札 2枚 フィールド なし

佑太 LP900 手札 1枚 フィールド レッド・デーモンズ・ドラゴン 伏せカード一枚

「へへ、おもしろええ、おもしろえぞ、佑太！お前とのデュエル！ワクワクしておもしろえよ！！」

笑ってる……本当にデュエルが好きなんだな。それに……

「ああ、俺もお前とのデュエルは楽しいぞ！十代！」

俺も楽しい！

「へへ、行くぜ。俺のターン！ドロー」

十代は引きに関して鬼強だからな

「よし、俺はE・HERO バブルマンを攻撃表示で召喚！このカードが召喚した時に自分のフィールドに

他のカード無い場合、デッキからカードを二枚ドロー！」

出たよ強欲な壺効果持ちのバブルマン

「さらに手札から戦士の生還を発動！墓地からスパークマンを手札に戻す！手札から融合を発動！手札のスパークマンとクレイマンを融合！」

おいおい、二枚目の融合も引いてたのかよ

「来い！E・HERO サンダー・ジャイアント！」

出たよ、反則モンスター。コストなしでモンスター一体破壊って鬼じゃね？

「E・HERO サンダー・ジャイアントの効果発動！相手の攻撃表示モンスター一体を破壊！ウェイパー・スパーク」

「くそっ！レッド・デーモンズが！」

「いくぞ！サンダー・ジャイアントでダイレクトアタック！ボルテ
イック・サンダー！」

止めと言わんばかりの雷が迫ってくるが、

「甘いぞ十代！俺は手札のバトルフェーダーの効果を発動！相手モ
ンスターのダイレクト宣言時に発動。このカードを手札から特殊召
喚し、バトルフェイズを終了させる！」

「くそっ！俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

十代 LP1900 手札 0枚 フィールド 伏せカード一枚
佑太 LP900 手札 0枚 フィールド バトルフェーダー
伏せカード一枚

あつぶね〜ギリギリ生き残ったけど……おそらく、次のターン
に何とかしないと俺の敗北は
決まってしまう！

「俺のターン！ドロー！」

引いたカードをチラ見で確認する

よし！

「俺は、天使の施しを発動！デッキから三枚ドローし二枚を墓地に
送る。そして、貪欲な壺を発動！墓地のモンスターを五枚デッキに
戻しシャッフル」

戻すのはレッド・デーモンズ、デーモン・カオス、バイス、ジャイアント、リペアラーの五体

「その後二枚をドロウする！さらに、手札から闇の誘惑を発動！デツキから二枚ドロウし、その後手札から闇属性モンスターを除外する。手札に闇属性モンスターが無い場合は手札はすべて墓地に送られるがな！・俺はダーク・リペアラーを除外する」

やべーな、ここまでいい流れなんて始めてだぞ。チートドロウへの第一歩か？

「俺はチューナーモンスター、ドレッド・ドラゴンを召喚！そして、リバーズカード、オーブン！

リビングデッドの呼び声を発動！蘇れ！ランサー・ドラゴニユート
！」

「レベルの合計は7！って事はまた、デーモン・カオス・キングか
！」

「レベル1バトルフェーダーとレベル4ランサー・ドラゴニユートにレベル2ドレッド・ドラゴンをチューニング！」

残念だが、俺のレベル7のシンクロモンスターはデーモン・カオス・キングだけじゃないぜ

「王者の叫びがこだまする！勝利の鉄槌よ、大地を砕け！」

「さっきとセリフが違う？デーモン・カオス・キングじゃないのか
？」

「シンクロ召喚！羽ばたけ、エクスプロード・ウィング・ドラゴン！」

「また、別のシンクロモンスターか・・・だけど、攻撃力はサンダー・ジャイアントと同じだぜ。相打ち狙いか？」

「いや、これで終わりだ！エクスプロード・ウィング・ドラゴンでサンダー・ジャイアントに攻撃！キング・ストーム！」

サンダー・ジャイアントに竜巻が迫る

「向かい打て！ボルティック・サンダー！」

竜巻と雷がぶつかり合う・・・が

「エクスプロード・ウィング・ドラゴンの効果発動！このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する」

「なんだって！くっ！サンダー・ジャイアントが！」

「さらに、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

「げえ！」

十代 LP19000

「くっそ、俺の負けか」

「楽しかったぜ十代！」

「ああ、俺も楽しかったっぜ！ガツチャ！またやるっぜ。今度は負けねえぞ」

「ああ」

十代と握手を交わす。すると、握手を交わした手から体全身にかけて温かいものが巡ってくる。十代の肩付近にぼんやりと何かが見える。熱が治まったかと思うと、ぼんやりとしか見えなかった物がハッキリと見えるようになる。そして、その見えた物とは、

「ハネ……クリボー……？」

「！！佑太、お前もカードの精霊が見えたのか？」

「いや、今、始めてみた」

『クリクリ』

見えてなかった……確かに初めて十代にあった時ははずなのに……何が起きたんだ？

「そっか、さっきまで見えて無かったのか」

まさか、十代とデュエルしたからか？

「ま、今は見えるんだから……良かったなお前」

は？・・・明らかに十代の視線は俺ではなく俺の背後に注がれている。俺にも精霊が付いているのか？

後ろを振り向くとそこには

『マ、マスター？』

俺を見つめる一人の女性が・・・え？誰？どっかで見た事あるよ
うな

『あの、マスター？・・・そうですよね、やっぱり私の事なんか
見えてないですね』

何か一人納得して落ち込んでる

「いや、一応見える事は見えてるぞ。とりあえず、お前は精霊か？」

『は、はい！私はあなたの精霊です！』

あ、思い出した、とらハコの月村忍に似てるんだ、でもキャラが違
うよっな・・・妹の方か？

「お前の名前って何？」

『えっ？』

「だから、お前の名前だよ」

『・・・わからないんですか？』

「いや、わからないから聞いてんだけど？」

俺のデッキに女性型モンスターなんかいないはずなんだが

『あの言葉は、”お前は俺のデッキのエースだ”って言うてくれたのは嘘だったんですか・・・そうですよ、私なんかがあなたのエースだなんて・・・』

また落ち込んだ。どんだけネガティブなんだよ！まあ、今回は俺が悪かったと思うが

しかし、俺のデッキのエースって・・・M・A・S・A・K・A

「おまえ、レッド・デーモンズか？」

『・・・そうですよ・・・』

「・・・マジかよ」

こういうのなんていうんだっけ？

「あつ、擬人化だっけ？」

まさか、ドラゴンが人になるとは

「ファンタジーなら無くは無いがこの世界であるとは思わなかったな」

『？あ、あの・・・』

まあ、いいか

「よろしくな」

『え？』

「これからよろしくな」

『あ……はい！よろしくお願いします！マスター！』

最後の微笑みはとてもきれいだっ

デュエル3「アカデミアでの初デュエル」(後書き)

やってしまった・・・レモンを擬人化とか・・・しかし、俺は後悔はしない・・・と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6094o/>

遊戯王GX～居眠りしたら異世界へ～

2011年8月21日09時39分発行